九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

A Low Ankle Brachial Index is Associated with an Increased Risk of Cardiovascular Disease:The Hisayama Study

小嶋, 巌

https://doi.org/10.15017/2534521

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

（別紙様式２）

氏　　名	小嶋　巌
論　文　名	A Low Ankle Brachial Index is Associated with an Increased Risk of Cardiovascular Disease:The Hisayama Study
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　鴨打　正浩 副　査　　九州大学　　教授　　飯原　弘二 副　査　　九州大学　　教授　　筒井　裕之

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

足関節上腕間血圧比（Ankle Brachial Index, ABI）低値は、下肢末梢動脈疾患の指標であり、心血管病発症の危険因子であることが知られている。しかしながらアジア人を対象としてABI低値と心血管病の関係を前向きに検討した疫学研究は少ない。本研究では日本人一般住民を対象としてABIと心血管病発症の関係を追跡研究の手法で検討した。対象は、2002年に福岡県久山町の循環器健診においてABIを測定した、心血管病の既往歴のない40歳以上の一般住民2,954人とした。これらの対象者をABI値により低値群（≦0.90）、境界値群（0.91-0.99）、正常値群（1.00-1.40）の3群に分類し、7年間追跡した。ABIと心血管病との関係は、Cox比例ハザードモデルを用いて解析した。年齢、性別、収縮期血圧、降圧薬服用、糖尿病、総コレステロール、HDLコレステロール、肥満、喫煙、飲酒、運動習慣にて多変量調整を行った。追跡期間中に134人が心血管病を発症した。ABI値の低下にともない心血管病の発症率は有意に増加した（傾向性P値＜0.001）。ABI正常値群を基準として、ABI低値群における心血管病発症のハザード比（多変量調整後）は2.40（95%信頼区間：1.14-5.06）と有意に上昇した。病型別の検討では、ABI低値群は、正常値群に比べ冠動脈疾患発症リスクが有意に高かった（ハザード比4.13［95%信頼区間:1.62-10.55]）。ABIと脳卒中発症の間に有意な関連を認めなかった（P=0.68）。以上の成績より、わが国の地域住民において、ABI値0.9以下の低下は、既知の危険因子とは独立して、心血管病、特に冠動脈疾患の発症リスクが上昇することが示唆された。

以上の結果は、この方面に新たな知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず論文の研究目的、方法、研究結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容およびこれに関連した事項について種々の質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格と判定した。